

令和6年度 前学期
科目責任者による授業科目の総合評価報告書
(2 学年・4 学年必修科目、選択科目)



自治医科大学看護学部

目次

【2 学年前学期必修科目】

心理学
家族社会学
統計学
基礎薬理学
病態学各論Ⅱ
グループ・アプローチ
実践基礎看護学概論Ⅱ
実践基礎看護学概論Ⅲ
看護技術論Ⅲ
看護技術演習Ⅲ
看護過程演習
成人実践看護学Ⅰ
老年実践看護学Ⅰ
文献講読セミナー

【4 学年前学期必修科目】

疫学
行政看護管理論
地域健康危機管理論
看護倫理学
看護管理学
看護政策学
国際看護論
生涯発達看護学概論Ⅴ
総合実習

【前学期選択科目】

気象学
化学
人体科学の基礎
医療とバイオテクノロジー
災害学
宇宙学
歴史学
教育学
人間関係論
身体活動論
医療英語
中国語
政治と国際関係論
基礎助産学Ⅰ
基礎助産学Ⅱ
基礎助産学Ⅲ
実践助産学Ⅰ
実践助産学Ⅱ
実践助産学Ⅲ
実践地域助産学
助産管理学

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
心理学	大塚公一郎	必修	2年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

学生の授業出席率は高く 14 回の授業のうち 2 回以上欠席した者は 8 名にすぎなかった。授業中の私語などはなく、熱心に聴講していた。授業の理解度については、下記に記す。学生による授業評価の件数は 0 であった。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

記述式の解答を求めた定期試験の成績分布をみると、100 点満点で 80 点未満の者が 2 名にすぎず、心理学の基礎的な知識を習得するという目標はほぼ達成できたと考えられる。

3. 教育方法の評価

抽象的になりがちな内容をわかりやすく伝える、必須と思われる基礎的知識は繰り返し強調して教授したが、目標の到達状況から一定の効果をあげたと考えられる。

4. 授業科目における運営上の課題

学習させる内容の多い、時間の限られた大教室での授業のため、教員から学生への一方通行的な教授法になりやすい。

5. 次年度以降に向けた改善策

できうる限り、教員から学生に問いを投げかけて答えさせ、双方向の授業になる工夫をする。授業内容、レジメの改訂、修正を行う。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
家族社会学	岩下好美	必修	2,4 学年前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

講義中はディスカッションの時間を設けていたが、毎回活発に議論がされていた。また、課題についても家族社会学の理論を応用して回答するテーマ設定を行ったが、ほとんどの学生が期限までにレベルの高いエッセイを提出してきた。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

家族社会学の理論を現実の社会に適用し、それを論拠に自己の意見をまとめるという最終レポートについてすべての学生が基準以上の記述を行っていた。

3. 教育方法の評価

家族社会学の理論の理解と共に、ディスカッションを各講義で3回程度実施し、さらにその後ランダムに発表をしてもらうことで、ディスカッションの経験とプレゼンスキルの向上があったと考える。

4. 授業科目における運営上の課題

受講人数が200名以上となり、2教室をつないでの講義となったため、不在のクラスについては議論の様子や理解の深度など対面でないと分からないことから難しさを感じるが多々あった。

5. 次年度以降に向けた改善策

次年度は1部屋に収まる受講人数となるため、ディスカッションや課題のフィードバックなどより丁寧な講義が実現すると考える。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
統計学	関山友子	必修	2年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

n=74/110 (67%)

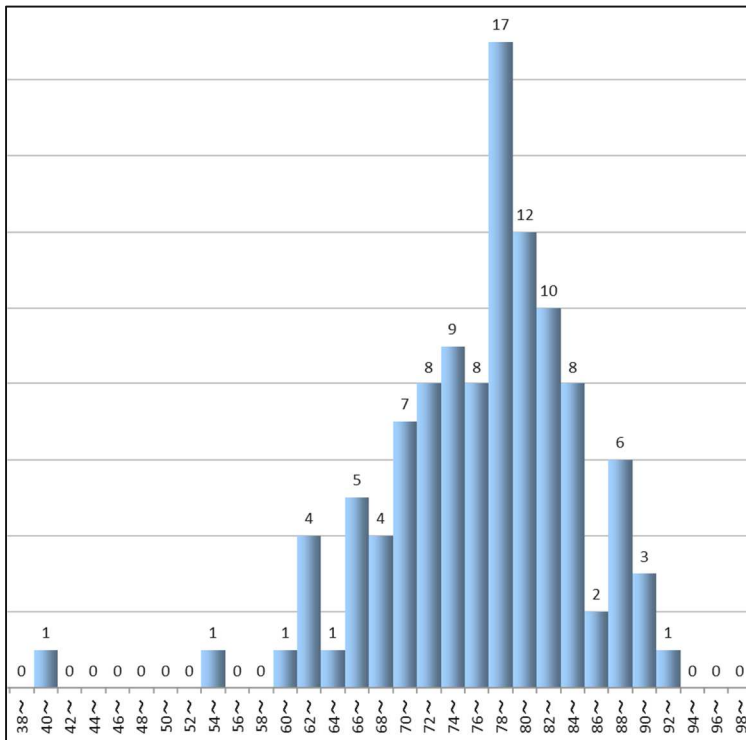
34用語の合計（人）	授業前	授業後（授業最終日）
説明できる	708	1227
聞いたこと（見たこと）はある	1072	943
聞いたことも見たこともない	628	158
無回答	74	154

- 授業後の質問票で「聞いたことも見たこともない」と回答した者が15人以上の用語（6用語）：算術平均、独立変数（説明変数）、回帰直線、カイ二乗分布、t分布、F分布
- 説明できると回答した者が、授業前よりも授業後の方が少なかった用語（2用語）：確率、中央値
- 授業前に「説明できる」と回答した者が全受講生数の半数（55人）以上の用語（2用語）：中央値、最頻値

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

【定期試験結果】

標準偏差：8.2 平均点：76.9 問題数：43 受験人数：108 信頼係数：0.555



- 60点以下の者は2名であった。

3. 教育方法の評価

- 「説明できる」と回答した者が、授業前よりも授業後の方が少なかった用語（確率、中央値）については、大学入学前に学んだ内容以外に学ぶ内容があったことを学生が認識した結果である可能性が考えられる。
- 定期試験結果ではほぼ全員が 60 点以上であったことから、量的直接評価においては、学習目的にある「推測統計学の基本的な概念の理解」についてはほぼ達成できたと考える。

4. 授業科目における運営上の課題

- 講義形式の一斉授業であるため、学生の個別対応が課題である。各学生が自分のペースで学習できるような工夫が必要となると考えるが、Moodle を有効活用できていない。
- 学習プロセス（学習意欲、自主的な学習態度など）も学習目的の到達に影響するため、評価する必要がある。

5. 次年度以降に向けた改善策

- 授業後の質問票で「聞いたことも見たこともない」と回答した者が 15 人以上の用語（算術平均、独立変数（説明変数）、回帰直線、カイ二乗分布、t 分布、F 分布）については、説明時間を増やし記憶に残るよう工夫する必要がある。
- 授業前に「説明できる」と回答した者が全受講生数の半数（55 人）以上の用語（中央値、最頻値）については、大学入学前にすでに学習目標に到達しているため、説明内容を簡略化し講義時間を短縮することが可能と考える。
- 個別学習が可能のように、映像教材やテスト式教材を Moodle 上で学習できるようにするといった工夫が必要である。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
基礎薬理学	土屋裕義	必修	2年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

昨年度まではコロナウイルスの蔓延による一部リモートという特殊な形態での講義であったが、今年からは完全に通常講義に戻った。したがって、スライドと音声だけでなく、講義を身振りなどで表現することが可能となった。学生の反応なども直に見ることができたので、授業を行う上で非常にやりやすかった。講義後に質問に来る学生も多く、興味を持った人が多いと思われる。コロナ明けで通常の授業が楽しく感じているのかもしれない。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

本試験のみで全員合格することを望んだが、残念ながら及第点に届かない学生が2人出た。1人は再試験レポートできちんとした内容のものを提出したために問題を感じなかったが、もう一人の方は、レポートも誤りが多く、理解して文章を書いていないことが感じられた。授業を聞いていない、あるいは参加していない学生がきちんと表出されたため、試験問題は適当であったと言える。授業内容も全て滞りなく完了し、講義・試験とともに当初の目標を達成した。

3. 教育方法の評価

今の授業は昨今話題の「紅麴」事件の社会的な問題点を取り上げるなど、学生の興味がそそられる内容を採用した。試験で問うたわけではないので理解度については不明だが、薬理学がベッドサイドだけの話ではなく生活に身近なものであることが伝わるよう努力した。今後もアップデートをマメに行い、最新の知見を提供できるようにしたい。

4. 授業科目における運営上の課題

例年のことであるが、薬理学として講義時間中に説明できるものは半分くらいしか無いのではないだろうか。重要なもののみをピックアップして講義をするしかないが、多くの薬で学生が触れることなく終わるのがいささか残念に感じる。

コロナ明け通常授業解禁1年目ということで、授業中に学生に答えさせることは避けた。コロナ罹患で欠席した学生が本試験でさえ現れたことを考えると、完全に以前の状態に戻すのはまだ早いかもしれない。再開するべきタイミングを模索している。

5. 次年度以降に向けた改善策

上記の通り、学生に答えさせる時間を取る事を考える。講義内容、配分に関しては特に改善すべき点はない。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
病態学各論Ⅱ	倉科智行	必修	2年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

授業評価の回答数がゼロだったため、学生から見た評価が得られなかった。
途中で簡単なアンケートを行ったが、進行速度や内容の難度について、おおむね適切との回答であった。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

定期試験の成績分布では、8割以上の学生が80点以上を獲得できていることから、押さえておいてほしい知識はおおむね理解されていると考えられた。学生らは本科目の目的・目標に到達できていると判断した。

3. 教育方法の評価

講義形式の科目であり、方法自体は従来と同様に行った。
毎回の講義を録画した動画をMoodleにて視聴可能とすることで、復習に役立てられるように配慮した。
小テストを紙媒体で配布して、採点用紙を提出するようにしていたが、提出が遅くなる学生もいた。

4. 授業科目における運営上の課題

配布する資料の分量が多くなりがちである。
MoodleでもPDFファイルをダウンロードできるようにしているが、ほとんどすべての学生が紙媒体で活用している。

5. 次年度以降に向けた改善策

講義の内容の更新（例：新しい治療についてのアップデート）を行う。
小テストをMoodle上での回答に戻すかどうか、検討を行う。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
グループアプローチ	永井 優子	必修	2 年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

学生の授業評価の回収数は1で、個人的な評価以上の分析はできない。

ムードル課題の取組み状況を示してもほとんど取り組まない者がこの数年増え、主体的な学習活動につながらない者が増えている。一方で、課題に真面目に取り組む、興味や関心を示す者は存在するが、少なくなってきた。COVID-19に罹患した3名と交通事故1名が追試験の対象となり、コロナ禍よりも追試験対象者が多かった。ムードル課題3つについては、できるだけ大学入学後の体験に基づいて記載をするように説明しているが、子どもの頃の体験しか書けないなど、学力低下および目的を確認せずに取り組む者が増えている。学習計画を立てることでラーニングコミュニティを形成できず、再試験で出題内容が容易にわかるときには復習をして容易に合格できるが、出題傾向等の試験対策を適切にできるものは少ない。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

成績評価はムードル課題20点、筆記試験80点(100点満点で実施し換算)とし、定期試験の平均点は、前者は17.6±2.96点(令和5年度は19.44±2.2点)、後者は50.5±9.6点、合計で68.2±10.0点で、ムードル得点は過去5年間で最低であったが、筆記試験では昨年度よりも改善した。定期試験の信頼係数は0.834で問題はなく、点双列相関係数も比較的高い問題が多かった。成績分布は、「優」7(6.7%)、「良」50(48.1%)、「可」53(30.8%)、「不合格」21(20.2%)となった。不合格者の再試験換算平均点は66.3±5.0点、合計83.0±5.6点で、信頼性係数0.602で低下したが、再試験素点rangeは66点から90点で、点双列相関係数が低い問題は正解100%の問題を除き、改善していた。信頼係数の低下は、80点以上の者が17名(81.1%)であった影響があると考えられ、全員合格となった。目的・目標はほぼ達成されたと考える。

3. 教育方法の評価

学生の意見を入力する課題と学習内容の定着を目的に結果を問わず取り組んだことを評価する小テストの2本立てのムードル課題を設定している。学習内容を深めるための映像資料等も関心がある学生が参照できるように整備しており、成績上位者の多くが視聴しており、有効と考える。一方で、内容に関心がない者や学力が比較的高くない者は視聴しない傾向があり、課題にも取り組まない傾向がある。教育方法は適切と考えるが、学力や関心の程度が二層化しており。標準とする学生像の把握と設定が困難になっている。教科書を指定していないため、文字化した出典情報と参考資料を掲載した共通のレジメが不可欠であり、コロナ禍以降、グループ活動をする経験が少なくなっており、グループで生じる様々なダイナミクスを創造することが難しくなっていると考える。

4. 授業科目における運営上の課題

ムードル課題等の確認など学科内教員の協力が不可欠で、運営にはマンパワーが必要である。小テストを発展させた練習問題等を作成し、学生自身のグループ活動体験に基づいて現象を記述したり、意味を考えることを課題とすることは不可欠だと考える。

5. 次年度以降に向けた改善策

主体的な学習活動の低下が継続する場合、目的・目標を変えずに到達レベルを下げる等対策が必要となる。同様の教育方法の非常勤講師への依頼は報酬等を検討する必要がある。看護学全学科目に係る科目として位置づけられて今日に至っている科目で、内容の一部が精神看護学関連科目の基盤としての位置づけがあることも今後検討が必要である。非常勤講師への依頼を本科目を設置以来努力して検討を続けているが、社会学、心理学等さまざまな学問分野にわたる内容であり、適任者を見出すことは難しかった。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
実践基礎看護学概論Ⅱ	半澤 節子	必修	2年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

学生の学習活動は、毎回の授業後に提出してもらったリアクションペーパーの内容によって確認した。学生による相違はあるものの、授業内容を概ね理解している学生が大半を占めていた。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

成績評価はレポート8割、リアクションペーパー2割で行った。レポートは事前に配布したルーブリックに沿って評価し、具体的な評価項目は科目の到達目標とした。「1. 精神の健康について身体・精神・社会的に理解し説明できている」、「2. 精神の健康を促進する看護活動の概要を理解し説明できている」、「3. 授業で用いた教科書や資料を引用し説明できている」（いずれも配点は20点）の平均点はいずれも15点、「4. 指定の文字数で記述されている」、「5. 段落が読みやすく整えられている」（いずれも配点は10点）の平均点は9.9点および6.9点であり、レポートの書き方という点で課題がある学生が多かった。授業内容の理解は概ね良好と思われる。

3. 教育方法の評価

学生にとって授業内容がわかりやすいように、できるだけ学習内容について具体的な事例などを示して、現状や課題を伝える工夫をした。また、授業時間内に短時間の動画の視聴を取り入れ、そのうえで、リアクションペーパーを用いて、授業内容の理解の程度を毎回確認できるよう提出を促した。こうした教育方法の工夫は、精神の健康について身体、精神、社会的な状況から理解するのを助けることにつながったと評価している。

4. 授業科目における運営上の課題

上記の授業内容の工夫により、学生の理解は概ね良好であったと思われる。たとえば、履修者のほぼ全員が授業ごとのリアクションペーパーを提出しており、その内容も必要な事項が記述されていた。また、評価の対象となるレポート課題について、各回の授業内容を理解したうえで記述されていた。次年度も引き続きこうした取り組みを継続したい。学生間の理解の程度の相違を改善できるよう、グループワークなどもうまく取り入れたいが、授業内容が講義のみとなってしまうやすい。

5. 次年度以降に向けた改善策

リアクションペーパーに対する教員によるコメントを授業で話題にすることが少なかった。授業内容に入る前に、できるだけ毎回、授業の最初に短時間でもリアクションペーパーのコメントをすることで、より双方向型の授業スタイルを展開していることが学生に伝えらる。今後はもう少し時間配分を工夫したい。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
実践基礎看護学概論Ⅲ	春山早苗	必修	2年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

学生による授業評価の提出は0だった。

15回のうち、14回は講義、1回は演習であった。セミナー形式の演習について、110名の履修者について、1名が欠席、2名が遅刻、1名が事前レポートの提出遅れ、1名が途中寝ていたが、他の学生は真面目に取り組んでいた。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

定期試験80%、記録物の提出20%で評価した。

総合評価は、優は73.6%、良は22.7%、可は3.6%、不可は0%であった。優のうち、90点以上は全体の9.1%であった。

3. 教育方法の評価

講義中心の科目であるが、途中で、それまでに学習したことを踏まえて、事例を用いた少人数によるセミナーを実施し、それまでの学習内容の定着と地域看護学の学習を高められるようにしている。現状の継続でよいと考えている。

4. 授業科目における運営上の課題

特になし

5. 次年度以降に向けた改善策

改善点は特になし。学生による授業評価を得る方法や、演習（セミナー）を間に入れている教育方法の評価について、今後、検討の余地がある。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
看護技術論Ⅲ	内堀真弓	必修	2年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

「学生による授業科目の評価票」の提出は0件であり、「授業に関する学生の声」について、特に意見は届けられていない。科目独自に配布しているミニットペーパーにおいて、授業のポイントや疑問点、理解度に加え、授業に関する改善を尋ねているが、学生の学習を妨げとなっている等の記載はなく、学生の学習活動に特段問題は見られなかった。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

本科目は、診断・検査・治療における看護職の役割を理解し、必要となる看護技術の原理や原則を学習することを目的としている。具体的には、感染予防や滅菌物の取り扱い、検査・治療の実施に必要な基本的な知識を学び、連動する看護技術演習Ⅲに繋げることで、単に流れとしての技術としてではなく、あらゆる実践の場に応用可能な礎となる知識の深まりを目指している。成績は、定期試験90%と学習態度10%で評価している。今年度は、これまでの定期試験結果から、問題の答えにくさや難易度の傾向を捉え、全体的に調整を図った。定期試験の成績は、A評価79名、B評価26名、C評価5名で、昨年のA評価13名、B評価32名、C評価60名（うち20名は再試験受験者）よりも全体的に良い結果であった。

3. 教育方法の評価

本科目では、連動する看護技術演習Ⅲとの繋がりのなかで、知識の定着を目指している。感染予防や滅菌物の取り扱い、検査・治療の実施に必要な基本的な知識に加え、演習で取り扱う看護技術を取り上げ、学んだ知識の実践への活用を講義している。また、授業後に速やかに本科目の復習に取り組み、演習に備えることができるよう Moodle での小テスト形式の課題を課している。知識の定着にこれらの教育方法は妥当であったと考える。

4. 授業科目における運営上の課題

本科目は、これまでの看護技術論よりも侵襲的な治療や検査のための技術を扱うため、あらゆる専門知識を必要とする。なかには未だ授業で取り上げられていないもの、知識が未定着のものもあり、他の科目の進行度や学生の理解度を確認しながら解説を加えるなど、学生の反応に常に注意を払い、双方向的な授業運営が必要である。また、定期試験結果から見た知識の定着については、一過性である可能性も考え、継続的に見ていく必要がある。

5. 次年度以降に向けた改善策

定期試験結果からは昨年度より改善の結果を確認することができた。今後は、原理・原則の学びを生かし、思考できる力を養うために、演習での学びから状況設定に応じた看護を考えるなど、講義と演習の繋がりを活かしたアクティブラーニングの機会をより積極的に設けていく。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
看護技術演習Ⅲ	石井容子	必修	2 年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

学生による授業評価の回答が 0 人であったことから、学生自身の授業評価の内容が不明であるため、次年度は授業評価のアンケートフォームの回答を求めるアナウンスをしていく必要がある。演習内容においては、注射関係の内容を多く含む内容であったため、注射針やアンプルの扱いに細心の注意を払いながら行った。例年と同様、針刺しやアンプルカット時の切創が数名いたが、その場での対応で止血後に演習の参加継続ができていた。よって学習活動については大きな問題なく実施できたと考える。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

評価は A 評価 76 名、B 評価 32 名、C 評価 2 名であった。評価は事前・事後課題 40%と技術試験の配点 50%、態度点 10%で構成されるが、再試験者はおらず平均点は 85.8 点であった。昨年度（平均点 77.8 点、再試験者なし）に比べて平均点が高く A 評価が多かったため、全体的にみると最終的には学習の目標は到達できたと考える。課題としては、技術試験では 56 名（昨年度 67 名）が再試験となった結果から、技術試験の到達目標が学生の到達レベルに合っていなかったことが考えられた。

3. 教育方法の評価

演習前には連動した科目である看護技術論Ⅲで講義があり、演習の単元の事前課題を Moodle で全問解答まで繰り返し解き、演習後は事後課題に取り組み、演習内容の手順や根拠をまとめて演習の振り返りをするといった構成である。演習だけでなく事前課題、事後課題ともにきちんと学生が取り組んでおり、学習効果は得られていると考える。

4. 授業科目における運営上の課題

例年通りの授業スケジュールで進められ、運営は円滑に行えたと考える。技術試験の再試験と再指導対象者が多かったため、予定していた授業の時間内に再試験・再指導を行うにあたり少々時間がタイトであった点が課題としてあがるが、技術試験の内容の見直しや指導方法・評価方法の検討により、再試験者・再指導者の対象が減ることでこの課題は解消されると考える。また、演習内容によって鋭利な資材を扱うため針刺しが生じるといった課題がある。この点に関しては例年、教員だけでなく附属病院の臨地スタッフの演習協力を各演習室に 1 名依頼しており、次年度も同様に協力体制を得ながら安全に学生が演習を行えるように引き続き配慮していく。

5. 次年度以降に向けた改善策

演習内容については、注射関係の医療資材を扱う演習が多く含まれるため、引き続き針刺しなどを生じないために学生の手技を見守り、附属病院の看護師を教育支援者のサポートも借りつつ学生の指導に目が行き届くよう次年度も安全への配慮を行っていく。また、必要な技術の習得ができるよう技術試験において試験内容や教員の指導方法、評価方法の見直しを検討し改善につなげていく。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
看護過程演習	小原 泉	必修	2 年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

「学生による授業評価」件数は0件であったが、グループワーク方式の授業では各学生より提出された質問・疑問カードから、大半の学生は一定の意欲をもって取り組んでいたといえる。模擬患者を導入しての演習後の事後課題提出物の内容からは、学生が患者役となつての技術練習では経験できない実践的な課題を理解し、大半の学生が取り組んでいたといえる。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

「看護過程を用いた看護展開の実際を学習する」という目的のもと、レポート評価 80%、授業参加態度 20%で評価を行った。具体的には、3つの学習目標については5段階、授業参加態度については4段階の評価でルーブリックを作成し、ガイダンスで学生に提示して、学生と教員の両方で目標と評価方法を共有した。

定期試験としての成績はA評価 37名、B評価 54名、C評価 12名、D評価 7名だった。D評価の7名は、再試験により全員が合格した。

3. 教育方法の評価

看護過程の各段階についてはミニ講義、ペーパーペイシェントを用いた看護過程の展開は自己学習とグループ学習および例示を含めた展開方法の解説（講義）、看護実践と評価は模擬患者を導入して学習した。授業終了後に各学生から質問・疑問カードの提出を求めたこと、グループ学習ではグループ担当教員が各グループをラウンドして着席して学生に助言をする形としたこと、アセスメントまで授業が進んだ時点で中間提出を設けて全学生の到達状況を確認したことによって、到達状況の低い学生を早期に発見し、グループ学習時間に教員が意図的に関わることにつなげていった。模擬患者の導入により、看護計画の実施と評価の実際を実践的に学習することができた。よって、教育方法は妥当であったと考える。

4. 授業科目における運営上の課題

到達状況の低い学生のルーブリック自己評価は、教員評価と比較してかなり高い学生が多いことから、求められているレベルに対する理解不足があると思われる。

模擬患者を導入した演習後の提出物は、演習目標に対して散漫な内容となる傾向がある。

5. 次年度以降に向けた改善策

ルーブリックの評価の観点ごとに、モデル的な記載内容を例示し、学生が求められるレベルを理解して取り組めるようにする。

模擬患者を導入した演習後の提出物も、モデル的な記載内容を例示し、制限文字数も提示して、明確な内容となるよう指導する。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

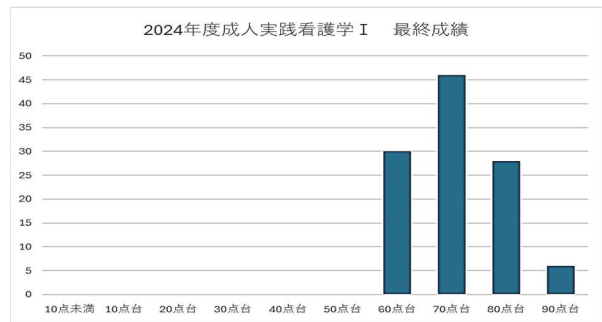
授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
成人実践看護学 I	村上 礼子	必須	2 年次前学期

1. 学生の学習活動の分析 (学生による授業評価の内容を含む)

- ・予習をして臨む学生も数名はいるが、授業に教科書も持参していない学生もいた。
- ・既習内容の理解などレディネスが十分な状態ではない学生が多いが、授業前にそのことに気付いて予習や事前課題に取り組む学生は少ない。しかし、解剖生理などの復習が必要であることに授業終了後には自覚する学生は多かった。
- ・授業補助資料の参照や事前・事後課題の Moodle の取り組み状況としては、半数程度の学生が授業後の確認では利用しており、試験間近で受講率は上がる傾向もあったため、一部の学生ではあるが機会を設けることで主体的な学習を行うことはできていた。

2. 目的・目標の到達状況 (成績分布の概要を含む)

- ・評価素点の平均(標準偏差)は、74.5 点(±8.3)であった。内訳分布は、60-70 点台 30 名、70-80 点台 46 名、80 点以上 34 名であった(図 1)。



3. 教育方法の評価

- ・教授内容が多く、学生にとっては、ポイントが絞りにくい科目ではあり、かつ、看護実践を思考するためには、基礎的知識の復習(解剖・生理)が必須の科目であり、学生のレディネスによっては基礎的知識の想起に時間を割かれるため、事前課題を提示することや、講義内容の復習と応用に関して自作の問題を繰り返し確認できるよう事後課題を提示した。具体的には、事前・事後いずれも Moodle を活用し、主体的学習が可能となるよう教授方法の工夫を行い、学生の受講状況から一定の評価は得られた。また、病いをもつ対象の理解を促すために、動画の視聴や授業資料としてイラストや図を多く使用するなどの工夫をした。それでも、成績評価の平均点が 70 点台前半であり、さらに学習成果を高めるためには、よりレディネスに合わせた授業内容の重要点を明確化し、同時に復習する要点も示せるような検討も必要である。

4. 授業科目における運営上の課題

- ・各コマの担当教員がオムニバスで授業を行っているため、担当教員間で各コマの授業構成や内容の擦り合わせを、時間をかけて行う必要があった。

5. 次年度以降に向けた改善策

- ・授業時間だけでは授業内容の分量が多く、重要点が伝わりにくいことがあり、授業内容の焦点化と事前課題だけでなく、復習する要点も示せる機会を設定していくことを検討する。
- ・機能障害の性質によっては、授業に臨むレディネスを高めておく必要性が高く、事前課題を提示するだけでなく、取り組む必要性と取り組む成果の実感が得られるような工夫を重ねて行う。
- ・学生の集中力の維持のために、講義資料は図や絵、動画などを有効に用い、学生の興味関心を高め、理解しやすくわかりやすい説明に努める。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
老年実践看護学Ⅰ	浜端 賢次	必修	2年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

今回は学生からの授業評価結果を得ることができなかった。しかしながら、毎回、リアクションペーパーを取得し、講義から学んだことや感じ考えたことについて確認した。学習活動をみると、リアクションペーパーから講義への参加態度や聞いていないと質問できない内容が多々記載されていることが分かった。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

成績結果を振り返ると、目的・目標に沿って教育方法を検討する必要があることが分かった。成績を概観すると優は約70%にとどまり、良が約25%、可は複数名であった。このことから、到達目標の達成については、十分ではなかったことが分かった。このことについては、教育方法の工夫がさらに必要であると言える。また、7回で終了する科目となるため、定期試験までの期間が空いてしまい、このことも到達目標の達成に影響を与えているのではないかと推測した。

3. 教育方法の評価

2に記載した内容とも関連するが、本科目は7回の講義で構成されている。そのため、短い回数の中で到達目標に達することが出来るよう、工夫することが求められている。しかしながら、今年度の学生の成績結果からはその効果が十分ではなかったことが推測された。特に、各回において覚えることが多い科目であるため、類似した言葉についてももう少し分かりやすく説明する必要があると思われる。特に老年保健や制度等とも関連する科目となるため、この点については工夫が必要であると思われる。

4. 授業科目における運営上の課題

3に記載した通り、運営上は7回の講義のため、より分かりやすい資料の工夫が必要である。また、記憶に残る講義の在り方などの検討が必要である。より良い講義を運営するためには、中間で一度フィードバックできる機会を作り、取得した内容については後半の講義に活かす検討も課題として残された。

5. 次年度以降に向けた改善策

第一に取り組まなければならない課題は、授業評価の回収率を上げることである。次に、中間で授業評価を行い、その結果を後半の講義に反映させることである。さらに、定期試験までの間に時間が空くことから、定期試験直前でも振り返りができるワークシートの検討についても考えていきたい。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
文献講読セミナー	佐藤幹代	必修	2年次 前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

- 事前・事後学習を通して主体的な学習態度を養うことを狙い、Moodle を用いた複数回の課題設定をし、Moodle を活用した学習方略を踏襲した。しかし、毎回、数名の提出遅れがあり、適宜、フォローした。
- グループディスカッションにおいては教員の促しにより、学生独自の意見が表現される状況もあった。
- 講義毎の「受けて票」を用いた5段階評価では、総合評価を5と評価したものが82.5%であった。5回目講義後の自由記載では、文献から得たことや考えたことを論理的にまとめる必要がある、提出前に何度も確認して仕上げたいと、学習意欲を持ち学習活動をしていた学生もいた。また、大学共通のアンケート46名の結果からは、授業の目的や目標、進め方や評価はシラバス通りであった、教員の関わりは教育的であった、学びやすい環境であったがいずれも3.37、「満足」は最も高く3.39であった。学習課題の質や量は適切であったかは、3.15と最も低かった。「グループで意見を共有したり改善点を考えたりすることができ、充実したセミナーとなった」「自分の興味があることについて探求するという機会があってとても良い」と言った意見の一方で、レポート提出期間をテスト期間以外に希望する者もいた。
- 教員-学生の双方向の継続的な課題に取り組む学習意欲の向上を期待し、最終レポート提出までにグループ担当教員から複数回にわたり書面や対面によるフィードバックを行った。これに対して、学生は教員のフィードバックを受け、目標到達に向けて複数修正を回繰り返し、学習に取り組んでいた。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

- GP 評価 : A 106名, B 4名, C 0名 (人数 110名)

2) ルーブリック評価

(1) レポート

①文献検索の方法や結果の記載 (20%) 平均 17.7 点 (range 14-20)

②文献 (研究成果) を要約し記載 (30%) 平均 27.2 点 (range 21-30)

(2) プレゼンテーション・参加態度

①文献の収集方法と内容を説明 (30%) 平均 27.4 点 (range 21-30)

②グループ討議 (20%) 平均 17.2 点 (range 14-20)

合計得点 平均 91.2 点 (range 73-100)

3. 教育方法の評価

- 評価対象の文献シートとレポート成果物、プレゼンテーション資料をルーブリックに基づき評価し、概ね評価は行えた。しかし、学習目標の評価基準と照らし合わせると、現行のレポート作成は目標達成度が高いため、これに変わる成果判定対象の設定も可能である。
- 文献検索演習2回の開催については、講義を進めながら文献検索を同時に行いアクセスが集中し、演習が円滑に行なえないことがあったため (回線アクセスの確認済みであったが)、教授方法を検討する。

4. 授業科目における運営上の課題

本年度は、学生数が110名であり、1グループあたりの学生人数が8名程度であったため、グループディスカッションが効果的に展開できないと言った課題が、担当した教員から聞かれた。グループ・ダイナミックスを重視した学習方略を検討する必要がある。

5. 次年度以降に向けた改善策

- 本科目の位置付けを丁寧に説明し、主体的な学習態度を培うことをさらに意識できるように関わる。
- グループワークはグループダイナミックスを重視した編成を検討する。また、担当教員の裁量でグループワークを行なっていくことは変えず、学生の反応 (疑問など) を共有し、より良い教授方略を吟味する。
- 図書館司書による文献検索の講義は録画媒体を活用した演習とし、繰り返し学習可能な環境を整える。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
疫学	関山友子	必修	4年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

疫学受講動機（複数回答） n=49		度数	%	頑張りの程度		度数	%
1疫学の単位を取りたいから	48	37.5	1 100%出し切った。もう頑張れない。	8	16.3		
2友達に会いたいから	8	6.3	2満足している。けど、もう少し頑張れたかも。	13	26.5		
3看護職にとって疫学の知識が必要だと思うから	10	7.8	3半分くらい頑張った。	20	40.8		
4疫学に関する知識を身につけたいから	14	10.9	4あまり頑張らなかった。	3	6.1		
5疫学を学ぶのが楽しいから	1	0.8	5頑張りがかったが、頑張れなかった。	4	8.2		
7受講が義務だから（必須科目のため）	34	26.6	無回答	1	2.0		
8大学に行くことが習慣になっているから	13	10.2	合計	49	100		
合計	128	100					

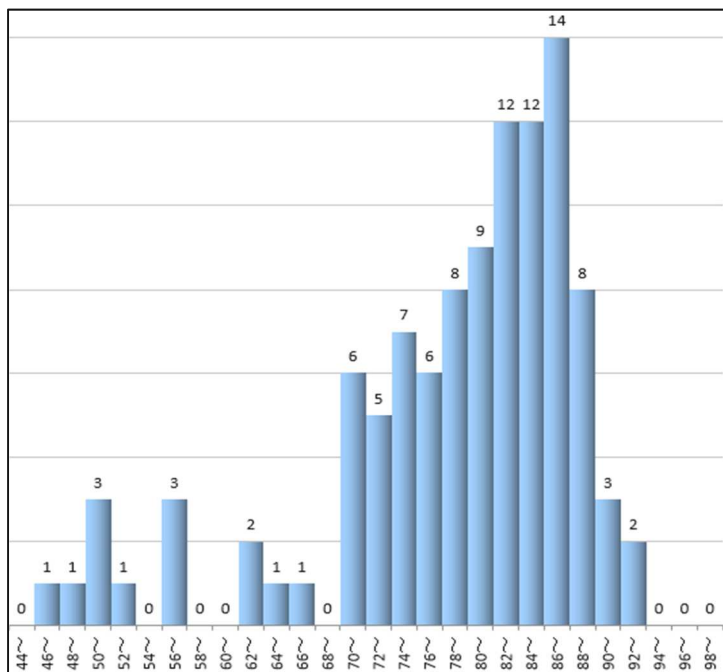
	疫学に関する全学習を10とした場合				
	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
授業以外の学習時間	47	1	10	3.87	2.193
授業以外で学んだ内容	45	1	10	4.18	1.992

- 疫学を受講した動機は「疫学の単位を取りたいから」が最も多く「受講が義務だから」が次に多かった。
- 疫学の学習についてどの程度頑張れたかについては、「半分くらい頑張った。」が最も多く「満足している。けど、もう少し頑張れたかも。」が次に多かった。
- 疫学に関する全学習時間を10とした場合、授業以外の学習時間は平均3.87（SD2.193）であった。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

【定期試験結果】

標準偏差：10.3 平均点：78.3 問題数：52 受験人数：105 信頼係数：0.794



- 60点以下の者は9名あった。

3. 教育方法の評価

- 疫学を受講した動機は「疫学の単位を取りたいから」が最も多かったことや、「受講が義務だから」という受動的な理由が次に多かったことから、疫学を学びたいという動機に基づいた自主的な学習に結びつけることは難しい可能性がある。加えて、当学部の入試科目は数学Ⅰ・数学Aであり、数字に苦手意識を持つ学生の割合も、数学Ⅱ・数学Ⅲ・数学B・数学Cを入試科目とする看護系大学に比べて多いことが予測される。このようなことから、本科目については、疫学を学びたいという動機に基づいた自主的な学習を行う学習者像を前提とすることは難しいと考える。
- 定期試験結果では1割弱が60点以下であったことから、量的直接評価においては、学習目的の「疫学とは何か、保健問題解決のためになぜ必要なのかを理解し、その方法論を習得する。また、健康指標、保健統計関連指標について理解する」についてはほぼ達成できたと考える。
- 疫学の定期試験日に何科目の試験が行われていたのかや疫学の試験の後にも試験があったのか、翌日にも試験があったのか等によっても定期試験の得点は変化するため、60点以下の1割弱の者に対しては、外的要因で合格できなかったのか、または何らかの学習サポートが必要だったにもかかわらずサポートが得られなかったために合格できなかったのかについて確認する必要がある。

4. 授業科目における運営上の課題

- 講義形式の一斉授業であるため、学生の個別対応が課題である。各学生が自分のペースで学習できるような工夫が必要となると考えるが、Moodleを有効活用できていないと考える。
- 学生がとらえた学習成果（理解度、知識の定着など）も評価する必要があると考える。

5. 次年度以降に向けた改善策

- 国家試験を控えた4年生であるため、そのことと関連付けて授業を進めることで、主体的に学習に取り組めない学生の学習動機を高めるといった工夫を行う。
- 個別学習が可能なように、映像教材やテスト式教材をMoodle上で学習できるようにするといった工夫を行う。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
行政看護管理論	市川定子	必修	4年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

共通の「学生による授業評価票」のQRコードを作成し、最後の講義で協力を依頼したが、実際に回答を得られなかったが、演習や講義は熱心に取り組んでいた。

レポート課題等もほぼ期限内の提出があり、学生の学習活動には問題ないと考える。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

レポートや定期試験から検討し、おおむね達成できたと考える。

3. 教育方法の評価

動画を活用し、わかりやすさに努めた。

また、演習は前年度の公衆衛生看護学実習と一連の事業であり、事業評価の演習について、前年度の公衆衛生看護学実習での学生への意識づけをした。

住民グループの演習では、興味関心を盛り上げ、グループダイナミクスが図れるような演習内容に工夫した。

学生のレポートからは、ほぼ目標は達成でき、評定もAがほとんどである。

4. 授業科目における運営上の課題

授業のカリキュラム上、事業評価の演習はタイトなスケジュールとなる。学生の負担を最小限にし、効果的に学習できるようシラバスとの内容と、実際の講義と演習の到達度との工夫が必要である。

5. 次年度以降に向けた改善策

学科目は4年次であるが、事業評価の演習について、3年次の公衆衛生看護学実習で参加する事業を題材とするため、3年次から科目の演習につちえ意識づけを行う予定である。

共通の「学生による授業評価票」のQRコードを作成し、最後の講義で協力を依頼し、4年に声をかけたが、実際には回答を得られなかった。来年度も、最後のコマの担当教員の協力を得たいと考える。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
地域健康危機管理論	島田裕子	必修	4 年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

- ・本科目は講義と演習で構成されており、各単元の講義後に行う演習の課題は、ほとんどの学生が課題に適切に取り組み、期限までに提出できていた。
- ・演習のグループワークにも全体的に積極的に取り組んでいた。
- ・学生による授業評価件数が0件であったことは、協力の呼びかけが不十分であった可能性がある一方で、特に不満がなかったということも一因として考えられる。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

- （本科目は演習50点（参加態度と記録物）、試験（50点）で構成されている）
- ・演習の平均点は46.6点、標準偏差は3.6であった。
 - ・定期試験の平均点は44.9点、標準偏差は2.95であった。
 - ・演習と試験を合わせた最終的な平均点は91.3点、標準偏差は5.9であった。
- 以上から、学生は概ね本科目の目的・目標は到達できているものと考えられる。

3. 教育方法の評価

2の目的・目標の到達状況からも概ね適切であると考えられる。

4. 授業科目における運営上の課題

- ・学生による授業評価について学生の協力が得られるようにしていく必要がある。
- ・演習の課題が手書きの様式である為、学生が効率的に課題に取り組めるようにする必要がある。
- ・大規模な自然災害が次々と発生し、それに伴い関連する法令や自助・共助・公助の取り組みも変わっていくため、最新の知識や情報を提供するとともに、学習範囲が広い為、学生が効率的に学習していけるようにする必要がある。

5. 次年度以降に向けた改善策

- ・学生による授業評価に協力が得られるよう、授業の中で評価入力のための時間を確保する等の工夫をする。
- ・演習の課題の様式は学生が効率的に取り組めるよう、ワードで作成できるようにする。
- ・日本看護系大学協議会が作成する地域健康危機管理に関する e ラーニング教材を活用しながら学生が効率的に学習し、知識の定着が図れるようにしていく。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
看護倫理学	小原 泉	必修	4 年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

「学生による授業評価」件数は0件であったが、各授業で学生よりフィードバックペーパーを提出してもらっており、大半の学生は関心をもって取り組むことができていた。しかし後述のように、レポート作成については授業での取り組みを反映させているとはいえない学生も少なくなかった。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

「医療・看護の現場で直面する倫理的課題と倫理の概念について学習し、看護者として人間の生命・尊厳・生活にかかわる権利を尊重するための基本的能力を養う」という目的のもと、レポート評価 80%、学習態度 20%で評価を行った。課題レポートおよび学習態度について評価ルーブリックを作成し、ガイダンスで学生に提示して、学生と教員の両方で目標と評価方法を共有した。

定期試験の成績はA評価44名、B評価61名、C評価1名だった。

3. 教育方法の評価

看護倫理に関する重要概念や倫理的葛藤に対する看護実践等を講義形成の授業で学習した後、安楽死に関するドキュメンタリー番組、インフォームドコンセントやがん告知を素材とした医療倫理教育用ドラマを用いた演習を行った。演習は、小編成のグループ討議と全体ディスカッションで構成した。大半の学生は講義形式の授業で学習した重要概念を思い出しながら、活発にディスカッションすることができていた。教育方法は妥当であったと考える。

4. 授業科目における運営上の課題

演習での活発で示唆に富む討議に比べて、レポートにその内容が反映した論述が乏しく、結果的にA評価に至らない学生が少なくなかった。

5. 次年度以降に向けた改善策

演習での活発で示唆に富む討議をレポート作成に活かせるように、論理的な説明のポイントや文献を用いた考察の深め方について、授業中に言及する時間をとっていく。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
看護管理学	浜端 賢次	必修	4 年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

今回は学生からの授業評価結果を得ることができなかった。しかしながら、毎回、リアクションペーパーを取得し、講義についての学生からの所感については確認することが出来ている。

本科目の評価はレポート評価に重みづけがされており、その内容は講義をしっかり聞かなければ書けないこととなる。学習活動を分析すると、先ず出席率についてはほぼ全学生が出席できており、しっかりと講義を聞くことが出来ている。また、本講義においては、隣接する附属病院より臨地教授を招いている。その方々のリアクションペーパーでは、細部に渡る内容についての質問もできており、真面目に取り組んでいた。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

看護管理の学習目的に沿って作成された到達目標 1 については、理解することが出来ていた。次に到達目標 2 と 3 については、臨地教授より講義を受け、その内容をふまえて看護メンバーシップの責務と役割については理解できたことをレポートで確認することが出来た。最後に到達目標 4 だが、看護管理に直面する課題については、病院のみならず地域・在宅で暮らす高齢者を支える施設や在宅医療の看護管理について学び、併せてレポートで考察することが出来た。以上のことから、設定した 4 つの到達目標には到達することが出来た。

3. 教育方法の評価

看護管理学という講義の性質上、隣接する附属病院の看護管理の実状や課題を知ることは学生にとって有益である。リアクションペーパーからも明らかになっているが、大変興味深く聴講することが出来ている。このことは 4 年生であり就職先であることも大きく関与していると思われた。また、教員の方からは二次医療機関・高齢者施設・訪問看護ステーションの看護管理についての講義を展開したが、看護を取り巻く多様な状況が理解でき、直面する課題に対して看護展開について真剣に考える機会にもなっていた。一定の成果が得られる教育方法となっていると考えている。

4. 授業科目における運営上の課題

本科目は到達目標設定の観点から、隣接する附属病院の臨地教授と共に講義を行っていく必要がある。昨年度までは同一の臨地教授に依頼する際、2 コマ続きであっても 1 コマずつ 2 回来ていただいた背景がある。講義運営上は毎週 1 コマずつ展開することが望ましいが、講義内容は繋がっているため 2 コマ続き展開できればとのことであった。昨年度以前も複数の臨地教授に来ていただいている科目であり、臨地教授との調整を行いながら学生の時間割に大きく影響しないような日程を調整していく課題がある。

5. 次年度以降に向けた改善策

大きく改善しなければならない点は、授業評価の回答率をあげるためのアナウンスの徹底と繰り返し学生に対して周知を行うことである。今年度の授業評価が回収できなかった点を真摯に受け止め、次年度は授業計画と併せて回収率を上げるための努力を行いたい。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
看護政策学	春山早苗	必修	4 年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

学生による授業評価の提出は0だった。

7回全て講義の科目である、うち1回は非常勤講師による講義となっている。この講義については、リアクションペーパーをとっており（評価の対象でもある）、その結果は好評であった。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

定期試験 80%、授業中に提出を求める記録物 20%で評価した。

総合評価は、再試の学生が1名いたが、不合格者はいなかった。

3. 教育方法の評価

全回講義とする現状の継続でよいと考えている。授業内容を踏まえて、授業中に政策形成に関するワークシートを配付し、そのポイントを説明し、それを定期試験の約半分の問題とし、そのことを授業中に学生へも伝えている。

4. 授業科目における運営上の課題

特になし

5. 次年度以降に向けた改善策

改善点は特になし。次年度は新カリキュラムとなり、非常勤講師が担当していた1回を別の専任教員が担当する。これも踏まえて、学生による授業評価を得る方法について、今後、検討の余地がある。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
国際看護論	江角伸吾	必修	4年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

今年度は学生の授業評価は0件であった。どの程度予習・復習したのか客観的な判断材料はないため、評価が難しい。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

学生の評価方法については昨年度と変更せずに提出物と試験で実施したが、成績分布は過去最低であった。目的・目標の達成はできているが、提出物の忘れにより成績に影響が出ていることが考えられる。

3. 教育方法の評価

授業方法については、体験型の演習を新たに入れた。その演習については、授業後の意見感想にて、「異文化についての理解が広がった」等の意見があり、教育方法としても妥当であったと考える。次年度も継続して実施していく。

4. 授業科目における運営上の課題

運営上の課題はない。非常勤講師であるが、学内の調整教員と必要時連絡を取り合い運営ができていると考える。

5. 次年度以降に向けた改善策

提出物の期限については、授業資料に明示する等、学生が理解しやすいように工夫する。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
生涯発達看護学概論Ⅴ	川野亜津子	必修	4年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

本科目は「リプロダクティブヘルス・ライツおよび女性特有の健康問題に対する看護・支援を学ぶ」という目的および目的に準じた3つの到達目標のもと、学習課題を設定し、15時間の講義を展開している。評価方法は筆記試験70%、事後課題（5回分）30%としているが、特に事後課題では单元ごとに学生が修得した知識を整理できるようなミニテストやワーク、講義内容をリフレクションできるような課題を提示し、学生の知識がより深まり定着できるように、学習活動を支援した。学生からの「女性特有の健康問題について、ライフステージに沿って段階的に理解することができた」、「女性の健康問題に対する看護・支援について、深い学びができた」などといった声から、学生は学習活動が円滑に、効果的に行うことができたと評価できる。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

事後課題（学習目的、課題に沿ったミニテストやワーク、講義内容のリフレクションなど）30%、実技試験70%にて評価を行い、受講者のうち9割以上がAあるいはB評価であった。本科目の目的である「リプロダクティブヘルス・ライツおよび女性特有の健康問題に対する看護・支援を学ぶ」という目的、および目的に準じた3つの到達目標を概ね達成できたと考える。

3. 教育方法の評価

評価方法として筆記試験70%、事後課題（5回分）30%としているが、事後課題においては单元ごとに学生が修得した知識を整理できるようなミニテストやワーク、講義内容をリフレクションできるような課題を提示し、学生の知識がより深まり定着できるように、教育方法を工夫した。また講義内容として資料や説明は図やグラフなどを用いて示したり、具体的に知識が深まるように事例を紹介したりなど、学生がイメージしながら知識が定着でき、学んだことを振り返り考えたり、看護へ応用できるように工夫した。

4. 授業科目における運営上の課題

運営上の課題は特になし。

5. 次年度以降に向けた改善策

旧カリキュラムであるため今年度は4年生に講義を行ったが、新カリキュラムからは2年生が受講対象者となる。周産期実践看護学Ⅰは履修済みであるが、周産期実践看護学Ⅱは履修途中（本科目と並行して履修する）、周産期看護実習は未履修であるため、学生が本科目の内容をイメージし、理解しやすいようにさらに資料や講義内容を工夫する必要がある。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
総合実習	春山 早苗	必修	4 年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

学生による授業評価票の回収数（率）は14（14.8%）であった。

授業評価の全ての項目について、「とてもあてはまる」＋「あてはまる」が100%であった。

自由記述において、担当教員間のコミュニケーションがうまくいっておらず、それにより学習しにくいと感じる学生がいたとの意見が1件あった。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

最終評価は「優」が96.2%、「良」が3.8%であった。

学生の自己評価と教員の評価平均値は、学生も教員も、最も高いのは目標1（看護の対象となる人々の権利を考え、人権を護ることができる）で、昨年度と同様の結果であった。最も低いのは、学生は昨年度と同様に目標2（理論的知識や先行研究の成果を活用し、根拠に基づいた看護を計画的に実践できる）であった。教員は学生とは異なり、目標4（看護職間、他職種、他機関との連携・協働の方法、必要な地域ケア体制について検討し、実習施設の地域における機能と役割について説明できる）が最も低く、次いで目標5（現在行われている看護実践における課題を明らかにし、看護専門職として将来展望を持ち、必要な改善について説明できる）であり、昨年度と同様の傾向であった。

3. 教育方法の評価

教育方法については、概ね適切と考えるが、教員の評価の平均点が最も低かった目標4（看護職間、他職種、他機関との連携・協働の方法、必要な地域ケア体制について検討し、実習施設の地域における機能と役割について説明できる）の到達度を高めるさらなる教育方法の工夫が必要であるとする。

4. 授業科目における運営上の課題

・昨年度は一昨年よりも授業評価票の回収率が低かったため、科目責任者及び各グループの責任教員の協力も得て、複数回、学生に対し授業評価への協力を依頼したが、回収率は14.8%と昨年度を下回る結果となった。

5. 次年度以降に向けた改善策

・次年度からは新カリキュラムの科目となり、2単位から3単位の科目となる。学習目標も今年度と全く同じではないが、教員の評価が最も低かった目標4に該当する学習目標を増加した1単位分で強化する実習内容としているため、到達度が高まることを期待したい。

・次年度からは新カリキュラムによる総合実習となるため、学生の評価も参考に課題の有無を把握し、必要時、改善を図っていく必要がある。授業評価については総合実習の最終日に記載時間を確保し、回収BOXにより回収するなど、回収率アップを図る。

・自由記述による学生の意見1件については、当該グループにフィードバックし、教員間のコミュニケーションなどについて振り返ってもらう。

以上

【作成日：2025年2月14日】

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
気象学	吉田龍平	選択	1,2 年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

日々の報道等による天気図や天気予報に目を通すことで授業で扱った内容が社会で活用されている様子を把握し、授業外での学習時間の確保に努めていた。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

時間降水量のカテゴリや大雪の警戒エリアといった災害に直結する情報を抽出できるようになった。当初の目標は概ね達成された。

3. 教育方法の評価

フィードバックシートを配布して授業の内容に関する質問・コメントを学生が記入し、次回の授業の冒頭ですべての質問に回答を行った。

4. 授業科目における運営上の課題

受講生の人数に合わせた適切な講義室の設定が必要である。

5. 次年度以降に向けた改善策

受講生の理解状況を見ながら扱う内容を調整する。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
化学	二瓶賢一	選択	1,2年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

「学生による授業科目の評価票」における回答がゼロのため、特になし。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

成績の平均は、85点だった。したがって、受講した学生はおおむね到達目標に達しているものと判断される。

3. 教育方法の評価

特になし。

4. 授業科目における運営上の課題

特になし。

5. 次年度以降に向けた改善策

引き続き、身近な題材を取り上げ、化学を楽しみながら学んでいただけるような講義を提供する。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
人体科学の基礎	倉科智行	選択	1,2 年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

学生による授業評価の回答数がゼロであったため、直接学生からの意見を聞くことができなかった。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

本科目のレポートの評価ではほぼすべての学生で優評価であり、科目で伝えるべき目的・目標は到達できていたと判断する。

3. 教育方法の評価

講義に視聴覚教材（DVD）を併用したことで、視覚的に理解しやすく伝えることができたと考える。

4. 授業科目における運営上の課題

受講学生の学習準備状態（高校での理科履修状況）に大きな違いがあるため、講義の難易度設定が難しい。

5. 次年度以降に向けた改善策

生物学の用語など、より幅広い内容とすることで、他の基礎医学分野の理解の助けとなるよう、内容の充実を図っていく。

より効率的な知識伝達のため、受講学生があらかじめどこまで知っているかを把握し、それを受けて内容の難易度を調整することも検討する。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
医療とバイオテクノロジー	平尾温司	選択	1,2 年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

直接の FD がないため、判断できる材料がない。しかし、学生のレポートを読む限り、多くの学生はこれまであまり関心のなかったゲノム編集や花粉症治療米、顕微授精や iPS 細胞による治験の話などに対して興味を持って聴講したようである。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

成績の分布だけを見れば到達しているものと思われる。

3. 教育方法の評価

本科目は植物篇、動物篇、医薬品、再生医療篇およびゲノム医療篇に分けて講義を展開している。また、再生医療篇においては、現在進行形で行われている iPS 細胞を用いた治験の現状について話をしている。ゲノム医療篇では、エイズに感染しないようにゲノム編集によって誕生した新生児の話等を盛り込んでおり、単なる座学ではなく、先端のバイオテクノロジーと生命倫理も考察させるようにしている。

4. 授業科目における運営上の課題

常に新しい話を盛り込む必要があるため、私自身が最新の情報を漏らさないようにする必要がある。そのため、外部施設に取材に行けるような時間をいただきたい。

5. 次年度以降に向けた改善策

常に新しい話をキャッチアップすることが重要と考えているため、世間を巻き込むような話題があれば、講義のネタとして用いることが可能であるが、そのような話題がなければ無理なので、改善策はない。これは時の運次第である。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
災害学	米川力	選択	1,2 年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

講義資料をもとに、興味を持った内容については学びを深めるために参考図書等を提示していたが、資料以上の学習をしている学生はほとんど見受けられなかった。

※学生による授業評価は0件

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

レポートの作成を持って学習内容の理解度を評価したが、講義資料に記載されている内容を丸写しし、自らの言葉で作成されたレポートは少ない印象であった。レポートの構成は授業内容に則した形のものが多く、災害医療を理解するという点では一定の水準に達したと思われる。成績については正規分布に近い形と考える。

3. 教育方法の評価

今年度は全て講義形式で行い、災害医療の実例を多く提示した内容であった。ただし、普段の医療として実践する内容ではないため、現実感を持たせるためには、ロールプレイやシミュレーションなどの授業も組み入れた方が良くかもしれない。

4. 授業科目における運営上の課題

複数の講師に講義を依頼したため、重複する内容が見られた。重複する内容は基本的な部分であるため、繰り返すことは問題ないが、提示の内容には工夫が必要と感じた。

5. 次年度以降に向けた改善策

講義当日に資料を見るのではなく、事前に目を通す（予習する）ことができるような工夫（ミニテスト）を行い、理解度をあげていきたい。また、ひき続き多くの実例を提示し、実際に自分が災害医療を実践する立場になったときに、何ができるか・何をしなければいけないかを考えられるような授業にしたい。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
宇宙学	大森理恵	選択	1,2 年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

- ・授業の欠席は少なかった。
- ・学生による授業評価票の提出はなかったが、課題レポートに受講の感想等を自由記載してもらった。結果は例年通り概ね良好で興味を持って受講していただけたようであった。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

- ・課題レポートから知識、理解が深まった様子がわかり、目的・目標とも概ね達成できていると感じる。

3. 教育方法の評価

- ・講義時間 90 分のうち講義 60 分を目安とし、残りは DVD を用いた内容の確かめ時間としている。DVD 視聴は宇宙学という内容的にも効果的で学生の評判も良い。

4. 授業科目における運営上の課題

- ・視聴覚機器の利用で戸惑うことが多々あった。授業効率が落ちてしまうので気を付けたい。

5. 次年度以降に向けた改善策

- ・学生が能動的に参加できる機会を設けられるよう、時間配分を工夫したい。
- ・教材、配布資料のアップデートを図る。
- ・本講義が将来にわたり興味を持ち続けるきっかけとなるよう、社会的に注目を集めるホットな天文話題を毎時間 1 つ以上提供する。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
歴史学	瀧音大	選択	1,2 年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

地元の農家と下野薬師寺への学外演習を行った際、学生たちは、農家の人や学芸員の話に、熱心に聞き書きしていました。また、レポートを作成する際には、学生の親族あるいは周囲にいる人にインタビューを行い、聞き書きした内容をふまえながら、自分の意見を述べようと心がけていました。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

目的であった、地域に暮らす人々の生活・意識の特性と変容を、歴史的な視点から理解することは、ある程度、達成したと思っています。

また、目標にかかげた、ある時代、ある場所に暮らす人々が、生活を大きく左右する地域の生業形態などにどのように適応してきたのか、についても、おのおの学生が知識として身につけたと考えています。

3. 教育方法の評価

人間（患者）理解の糸口の1つとして、社会や価値観の変化、個々人の人生史を理解する視点の涵養に重きをおく。また、[演習]とある回は校外学習を設定し、フィールドから学ぶ経験を重視するので、自転車の往復を厭わない積極的な学生の受講を期待する。この科目では、講義終わりに次の講義のキーワードを提示するので、それについて各自が事前に調べ、予習しておくこと、校外学習の経験と知識の結びつきを意識しつつ復習に臨むことが大切である。

4. 授業科目における運営上の課題

気温が高い日に学外演習をおこなった際、体調を崩した学生がいた。また、座学の際には、スライドを使用するため、教場がやや暗くなる。後ろの席で、見えにくいと感じた学生がいた可能性がある。

5. 次年度以降に向けた改善策

学外演習の際には、水分補給をこまめにしたり、話を聞いている途中でも体調が悪くなったら、すぐに報告するなど、さらに気軽に、そしてコミュニケーションを密にしながら、演習を実施するよう心がけます。また、座学については、教場の暗さや見えにくさについて、講義の最初に、毎回、学生に聞くことにします。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
教育学	池田 幸也	選択	1,2 年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

受講学生は予習復習を含め意欲的に学習していた。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

受講学生は講座の学習目標を達成し、知識のみならず問題意識の醸成がみられた。

3. 教育方法の評価

毎時間の講義時における学生との意見交換を含む双方向の学びを展開できた。

4. 授業科目における運営上の課題

講義だけでなく双方向のやり取りや討議を導入しているが、学習内容に応じたグループ討議などによる学習の深化を進める必要がある。

5. 次年度以降に向けた改善策

学生の相互のグループ討議や発表の機会をさらに増やしていく。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
人間関係論	大塚公一郎	選択	1 年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

学生の授業出席率は大変高く履修学生全員が、7回の授業すべてに出席していた。演習と講義とも授業中の私語などはなく、熱心に参加していた。授業の理解度については、下記に記す。学生による授業評価の件数は0であった。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

演習での学生の取り組みの状況、演習の経験、および講義内容についての理解度を確認するための記述式レポート課題とした定期試験の成績分布をみると、ほぼ全員が100点満点で80点以上であり、人間関係論の基礎的な理論とその活用を説明するという目標はほぼ達成できたと考えられる。

3. 教育方法の評価

講義については、抽象的になりがちな内容をわかりやすく伝える、必須と思われる基礎的知識は繰り返し強調して教授したが、目標の到達状況から一定の効果をあげたと考えられる。

演習についての教育方法については、演習中の学生のふるまい、態度、応答や演習経験についての課題レポートの評価からかなりの効果をあげたと考えられる。

4. 授業科目における運営上の課題

講義については学習させる内容の多い、時間の限られた大教室での授業のため、教員から学生への一方通行的な教授法になりやすい。

5. 次年度以降に向けた改善策

講義については、できうる限り、教員から学生に問いを投げかけて答えさせ、双方向の授業になる工夫をする。授業内容、レジメの改訂、修正を行う。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
身体活動論	板井美浩	選択	1,2 年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

◎「学生による授業評価表」は回収率0%だった。

◎「科目独自の出席カード」への記入では回収率100%で学生からの評価を集めることができ、下記のような意見を聞くことができた。

- ・スポーツ技術の優劣（できばえ）でなく、新しい身体感覚を得ることが授業の目的であることが理解できた。
- ・多数の履修者（約100名）で活動するための振舞い方が理解できた。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

「体を育てる」ことが体育の一つの重要な役割であるが、「体で育む」ことがその先にある体育（体を通じた自己と他者の理解）であると考え、毎回の授業の中で言葉で説明し実践と結びつけるよう働きかけた。

「科目独自の出席カード」の記入内容から、ほとんどの学生が上記のことを理解しているものと思われ、中でも1割程度の学生はその本質について自分の言葉で表現できるようになっていた。

3. 教育方法の評価

多数の履修者（約100名）があるため、大勢でもできる運動・スポーツを提供し、ルールについても科目独自の工夫を加えて全員が安全に実施できるよう配慮した。

また、2名の非常勤講師の協力を得ることで、学生の体調変化等への安全性が非常に向上したものと思われる。

4. 授業科目における運営上の課題

本科目において、近年の暑熱環境は脅威である。

学生の体調管理にはこれまで以上に注意を払っていく必要がある。

5. 次年度以降に向けた改善策

是非とも看護学部の専任教員を採用していただきたい。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
医療英語	鹿野浩子	選択	2,4 年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

毎週1つの英語で書かれた医療文献を読み、それについて様々な研究の情報を収集し、自分の意見を論理的に述べる力を養うことが出来た。英論文を正確によみ、それについて自分の意見は、Moodle を用いて、記載させ、授業内で、様々な意見を紹介した。紹介されることで、該当学生にとっても自分の意見が尊重されたと自信につながった。グループにおいて、2つ発表を行った（1つは、英論文を読み、日本語で発表をし、もう一つは、自由トピックで、英語で発表）。様々な視点を持ち寄ることで、学生にとって、情報を得られ、患者とのコミュニケーションにも活用できると考えた。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

毎週1つの英論文を読ませ、それに対し、自分の意見を述べさせること。並行して、2つのグループ発表資料を作成させることは、かなり学生にとって大変な作業であったかと思うが、学生が主体となって、進めていくことで得られた学びも大きかった。

自分の意見を全ての発表に含めることで、意見を言うこと、そして正しい答えなど無いということが経験させることができた。

3. 教育方法の評価

英語に限らず、日本語の発表でも共通する発表の構造、そして、英語発表でのサンプル発表方法を予め学ぶことで、学生にとっても学会に参加するような雰囲気となった。さらに、学生の発表に関して、学生からも感想を機会があり、発表言語が英語であっても、かなり学生は理解していたことが分かった。このことから、学生のヒアリングはかなり良く、発音が聞き取れなくても、スライドの英語から理解していたことが伺えた。敢えて、学生には日本語で説明をせずとも、英語で理解可能であることが分かったことは良かった。

4. 授業科目における運営上の課題

学生数が多かったため、個人の発表ではなくグループの発表となってしまった。グループ数も多くなって、全部の発表を行うのに時間を要してしまった。

本科目に限ったことではないが、備え付けのPCの不具合が目立ち、発表と発表との移行がスムーズに行えなかった。

5. 次年度以降に向けた改善策

学生の発表に関する質疑応答は、日本語で良いとしたが、1言、2言（Thank you for your wonderful presentation. I would like to ask you …など）定型文を英語で覚えさせて言わせるようにして、少しでも英語に触れさせる、英語を身に着けるように工夫する。英論文も、学生にとって楽しく読めるような論文を吟味していきたい。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
中国語	趙 敏	選択	1,4 年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

学生の学習目的や背景が多様であり、特に専門的な分野や特定の技能を重視する学生に対して標準的なカリキュラムだけでは言語を習得するのが難しいことがあります。一部の学生は授業の進度に合わせて、日常的に復習や予習を行いましたので、言語の実践力が向上しました。小テストや授業中の会話練習など、学習の成果が見える形で学生の学習活動を効果的に進展しました。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

基本的な挨拶や簡単な会話文が質問、応答できるレベルになりました。
基本的な文法や語彙について、簡単な作文ができるレベルに到達しました。
語学試験に合格することを目標にする学生にとっては初級レベルの取得ができました。
多文化、多様性に対する理解ができました。

3. 教育方法の評価

中国語の学習には、内容や難易度に大きな差があり、学生のレベルに合った適切な方法を選ぶことが重要です。特に初級者にとって、発音、語彙また複雑な文法は身につけるのが難しいので、学習意欲を高める様々な方法を取り入れています。

また授業中にペアやグループの活動が行われて、個別指導ができました。

さらに、中国語の学習は言語だけではなく、中国文化や社会についての視聴覚教材を紹介しながら進めたことで、モチベーションを保つのに役立ちました。

4. 授業科目における運営上の課題

言語学習は長期間にわたる努力が必要ですが、定められた時間や形式での授業運営では、学生の学習ペースに合わせる事が難しい場合があります。

5. 次年度以降に向けた改善策

初級者は新しい言語の発音システムや難しい文法を習得するまで、ある程度の学習時間が必要です。学生のモチベーションを保つために、学習の進歩を視覚化したり、目標を設定する機会を増やしたりする工夫が必要です。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
政治と国際関係論	正田浩由	選択	1,2 年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

アンケート回答がゼロだったので分析は困難ですが、真面目に学習してくれたと思います。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

学生さんのほとんどが試験でよく書けていましたので、目的・目標はある程度到達できたと考えます。

3. 教育方法の評価

レジュメを配布し、それに基づいて授業を進めるという昔ながらのスタイルで行なったが、学生さんはよく聞いて学んでくれたので、この方法は有効と考えます。

4. 授業科目における運営上の課題

学生さんは熱心に聞いてくれましたので、特に課題はありません。

5. 次年度以降に向けた改善策

次年度も引き続き学生さんに分かり易い授業が実施できるよう努力いたします。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
基礎助産学Ⅰ	川野亜津子	選択	4年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

本科目は「妊娠期・分娩期の生理と病態について学習する」という目的および目的に準じた6つの到達目標のもと、学習課題を設定し、15時間の講義を展開している。評価方法は筆記試験80%、課題レポート15%、学習態度5%としている。毎回の講義では、前回の学習内容をしっかりと身に付けながら積み重ねていけるように要点を押さえながら質問形式で展開するなど工夫した。学生は学習のポイントをつかみながら知識を定着させ、学習活動を進めることができていた様子であった。また課題レポートでは、本科目で学んだ妊娠期・分娩期の知識を臨床の現場でどのように活用するのかについて深く理解し、整理することができるような課題を提示し、学生の知識がより定着できるように、学習活動を支援した。学生からの「しっかり理解しながら学習を進めることができた」、「学んだ知識をどのように実習で活用すればよいか理解できた」などといった声から、学生は学習活動が円滑に、効果的に行うことができたことと評価できる。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

筆記試験80%、課題レポート15%、学習態度5%にて評価を行い、すべての学生がA評価であった。本科目の目的である「妊娠期・分娩期の生理と病態について学習する」という目的、および目的に準じた6つの到達目標を概ね達成できたと考える。

3. 教育方法の評価

評価方法として筆記試験80%、課題レポート15%、学習態度5%としている。毎回の講義では、前回の学習内容をしっかりと身に付けながら積み重ねていけるように要点を押さえながら質問形式で展開するなど工夫した。また講義資料は図やイラスト、模式図を活用し、学生が理解しやすいような示し方を取り入れた。学生は学習のポイントをつかみながら知識を定着させ、学習活動を進めることができていた様子であった。また課題レポートでは、本科目で学んだ妊娠期・分娩期の知識を臨床の現場でどのように活用するのかについて深く理解し、整理することができるような課題を提示し、学生の知識がより定着できるように工夫した。学生からの「しっかり理解しながら学習を進めることができた」、「学んだ知識をどのように実習で活用すればよいか理解できた」などといった声から、取り入れた教育方法のねらい、本科目の目的、目標としては達成できたと評価できる。

4. 授業科目における運営上の課題

運営上の課題は特になし。

5. 次年度以降に向けた改善策

周産期看護学実習を履修した4年生が対象の科目であるが、近年の助産学生は、分娩見学の経験が全くない者が増加している。学生が本科目の内容「妊娠および分娩」をイメージし、理解しやすいようにさらに資料や講義内容、動画なども取り入れるなど、工夫の内容を検討していきたい。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
基礎助産学Ⅱ	川野亜津子	選択	4年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

本科目は「産褥期・新生児期の生理と病態について学習する」という目的および目的に準じた4つの到達目標のもと、学習課題を設定し、15時間の講義を展開している。評価方法は筆記試験95%、学習態度5%としている。毎回の講義では、前回の学習内容をしっかりと身に付けながら積み重ねていけるように、要点を押さえながら質問形式で展開したり、本科目で学んだ産褥期・新生児期の知識を臨床の現場でどのように活用するのかについて深く理解し、整理することができるように、実際の臨床場面を提示しながら説明したりなど工夫した。学生は学習のポイントをつかみながら知識を定着させ、その知識の臨床活用についても理解しながら学習活動を進めることができていた。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

筆記試験95%、学習態度5%にて評価を行い、受講者ほぼ全員がA評価であった。本科目の目的である「産褥期・新生児期の生理と病態について学習する」という目的、および目的に準じた4つの到達目標を概ね達成できたと考える。

3. 教育方法の評価

評価方法として筆記試験95%、学習態度5%とした。毎回の講義では、前回の学習内容をしっかりと身に付けながら積み重ねていけるように、要点を押さえながら質問形式で展開したり、本科目で学んだ産褥期・新生児期の知識を臨床の現場でどのように活用するのかについて深く理解し、整理することができるように、実際の臨床場面を提示しながら説明したりなど工夫した。筆記試験の結果から、学生はしっかりと知識を身に付けることができていたと言え、取り入れた教育方法のねらい、本科目の目的、目標としては達成できたと評価できる。

4. 授業科目における運営上の課題

運営上の課題は特になし。

5. 次年度以降に向けた改善策

周産期実習を終えた4年生が対象の科目であるため、産褥期の女性や新生児の看護についての基礎知識は身につけている上での受講であるが、産褥0日～5日目（退院）、1か月健診までのすべての期間を経験できている学生は年々減少傾向である。学生が本科目の内容「産褥期および新生児期」について、分娩から退院、1か月までのすべての期間における変化をイメージし、経過を理解しやすいようにさらに資料や講義内容、動画なども取り入れるなど、工夫の内容を検討していきたい。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
基礎助産学Ⅲ	角川 志穂	選択	4 年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

学生による授業評価票の提出はなかったが、課したレポート課題や演習にいずれの学生も主体的に取り組んでいた。また、作成した小集団指導の計画に基づき実践した結果を客観的に振り返り、考察することができていた。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

6名全員がA評価であり、母子と家族の健康、母子と家族の心理的側面及び妊娠・出産に関わる社会文化的側面について学ぶことができていた。特に、バースレビューの演習では日本人特有の経膣分娩への思いを強く感じる傾向について、帝王切開分娩となった女性への関わりについて演習を通して理解することができていた。

3. 教育方法の評価

本科目の講義を行うにあたり、学生の課題として大きく2つ挙げられた。

課題の1つ目として、毎年助産学実習において、バースレビューを行うことに難しさを感じ、目標の1つにある「周産期女性の心理について理解する」ことが難しい学生が多い。また、その必要性や意義についても理解が乏しい。

課題の2つ目として、母子の健康生活を支援するための小集団指導では、対象者の特性を理解した上での計画立案が難しい。

1つ目の課題については、バースレビューに関する講義を行ったうえで、分娩経過の異なる事例に対して実践的にバースレビューの演習を行った。学生は対象者の出産に対する思いを受け止め、出産体験の否定的な思いから肯定的な思いへと変化するような関わりの難しさを感じていたが、バースレビューの意味については理解することができていた。

2つ目の課題については、集団指導の目的から評価までの指導計画を立案し、助産師役、妊婦役、父親役で実践的に行った。実践してみることで、対象者に対して根拠を伝えることの大切さや、対象者の特性に合わせた説明方法を考える必要があることを理解し、それぞれの実践の評価が行えていた。

このように、一方的な講義だけでは理解が難しい内容については、演習的に教授することで学習効果が上がると考える。

4. 授業科目における運営上の課題

運営上の課題はない。

5. 次年度以降に向けた改善策

次年度からの新カリキュラムにおいて本科目は開講されないが、本科目に含まれている内容は重要であり、引き続き他の科目において教授していくことが必要である。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
実践助産学Ⅰ	上野知奈	選択	4年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

本科目では、妊娠に関する診断やフィジカルアセスメントについて学び、実際に実習の場で活かせるようシミュレーション学習を用いて展開している。毎回演習後に、リアクションペーパーを配布回収し、学生の演習内容に対する理解や自己の課題を把握した。シミュレーション学習による1事例を通して、フィジカルアセスメント、助産過程の展開、個別健康教育を行うことで、技術や思考の足りない部分が整理され、次に活かしやすくなったとの感想があった。実際の妊婦健診を想定し、1事例に対して情報収集となるフィジカルアセスメントから保健指導まで一貫して行うことは、実習における実践に繋がりがやすく、妊娠週数を意識した妊婦への支援方法を学びやすいと考える。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

シラバスに記載された到達目標、[妊娠の診断、妊婦・胎児及び家族の健康状態のアセスメントに必要な基礎的技術の習得する]について、学生は事前学習と講義内容で学習した知識をもとに、演習で技術を実施、指導を経て復習が行えており、目標に到達できたと判断する。

また、[妊婦、胎児および家族に必要な健康教育について理解する]については、助産過程を通して必要な助産ケアを見出し、個別性のある健康教育内容を考え、展開案を作成することができていたため、目標に到達できた。

さらに[妊婦と家族への健康教育に必要な基礎的技術を習得する]についても、妊婦のニーズを意識したわかりやすい参加型の健康教育を実践したグループ発表を見ることによって、不足が見られたグループにおいても次回への課題を見出すことができていたため、おおむね到達できたと判断する。

3. 教育方法の評価

講義に基づくシミュレーション学習は、学生の主体的な学習を促し、課題を明確にするため、有効に学習できる。しかし、技術習得が前提となっており、周産期実践看護学Ⅰ・Ⅱで学んだ内容を復習して取り組む必要があるため、事前学習に充てられる時間の把握が必要であった。学生のレディネスによっては、演習内で技術の復習を行うなど、調整が必要である。

4. 授業科目における運営上の課題

特になし

5. 次年度以降に向けた改善策

妊婦と家族への健康教育の演習では、学生が作成した指導案の目的目標の設定が曖昧となり、指導内容と妊婦のニーズにずれが生じた。演習の中で、個別健康教育の意義や組み立て方を講義し、実践に移しているが、次年度以降は、新カリキュラムとなり健康教育の演習時間が倍増するため、健康教育の方法について具体的方法を提示しながら、時間をかけて理解を促す講義内容と演習方法に改めていく必要がある。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
実践助産学Ⅱ	上野知奈	選択	4年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

本科目では、主に分娩期の助産過程展開につながる知識、技術を学ぶ。学生は、講義後、理解が追い付かなかった部分の質問をしており、自ら知識の確認が行えていた。また、実際に分娩期の助産過程の展開では、提出物の個別指導や修正の添削を行ったことで、足りない視点や考え方を具体的に知り、修正につなげることができていた。さらに、初産婦、経産婦の2事例を展開事例としたことで、分娩経過の多様性についても理解し、必要な指標の使い方やアセスメント方法について学ぶことができていた。

分娩介助については、演習内で必要な技術の確認をしたが、学生から演習の復習を重ねることでやっと身についたという声が聞かれ、技術の定着を図るためには復習時間を要した。復習時間にも教員が指導に当たることで、学生からの質問を十分に受けることができ、安全な分娩介助技術の習得につながったとともに主体的な学習を促せたと考える。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

シラバス到達目標である、[分娩進行に伴う身体心理的变化および胎児に対するアセスメントに必要な基礎的技術を習得する]、[妊娠期・分娩期の助産過程に必要な知識と技術を習得する]、[分娩介助に必要な基礎的技術を習得する]については、講義や医師のCTG判読に関する講義を通して知識を学び、技術練習後に事例を用いて分娩介助を実施し、アセスメントに基づく助産ケアの技術が獲得できていたため、到達できたと判断する。

[分娩経過中の産婦と家族への支援方法を理解する]については、助産過程において産婦の社会・心理面を分析したうえで、産婦への指導やケアを学ぶことができており、到達できたと考える。

[出生直後の新生児の生理的变化と胎外生活への適応についてアセスメントに必要な基礎的技術を習得する]では、NCPRに基づき事例に対する新生児蘇生を演習し、アセスメントの添削・指導を通して知識・技術の獲得ができていたため、到達できたと判断する。

3. 教育方法の評価

分娩介助演習では、復習に活用できる「分娩介助技術チェックリスト」を配布し、学生同士で自己点検できるようにした。これにより、演習外の復習時間が有効に活用でき、技術の獲得に至ったと考える。分娩介助技術を獲得するためには、時間をかけて復習をすることが必要となるため、新カリキュラムに移行後には、学生の復習時間を把握し、調整が必要となる。

また、医師から、医学的な知識、産科ガイドラインの活用の実際を直接講義したことで、実際の場면을想像しやすく有効な教育方法であったと考える。

4. 授業科目における運営上の課題

特になし

5. 次年度以降に向けた改善策

新カリキュラム移行後は、助産に関する講義・演習が増えるため、分娩期の助産過程、分娩介助演習における自己復習時間が確保できるか把握し、演習内容を調整する必要がある。

評価方法として、演習における事前・事後課題を15%としているが、ルーブリック評価を用いることで、学生に自己の課題が明確に伝わる方法を検討する必要がある。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
実践助産学Ⅲ	川野亜津子	選択	4年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

本科目は「早期産褥・新生児期の母子と家族について理解し、そのアセスメントと支援の基礎的技術を習得する」という目的および目的に準じた6つの到達目標のもと、学習課題を設定し、30時間の講義を展開している。評価方法は筆記試験95%、学習態度5%としている。毎回の講義では、基礎助産学Ⅱ「産褥期・新生児の生理と病態について学習する」で修得した知識を確認し踏まえながら、知識の活用と応用について理解し実践できるよう事例を用いて説明するなど、学生の知識がより定着できるよう支援した。技術では、基礎となる知識を始め、そのメカニズムや応用についてしっかりと学んだうえで、演習を通して技術が定着できるよう支援した。学生からの「しっかり理解しながら学習を進めることができた」、「学んだ知識・技術をどのように実習で活用すればよいか理解できた」などといった声から、学生は学習活動が円滑に、効果的に行うことができたと評価できる。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

筆記試験95%、学習態度5%にて評価を行い、受講者の全員がAあるいはB評価であった。本科目の目的である「早期産褥・新生児期の母子と家族について理解し、そのアセスメントと支援の基礎的技術を習得する」という目的、および目的に準じた6つの到達目標を概ね達成できたと考える。

3. 教育方法の評価

毎回の講義では、基礎助産学Ⅱ「産褥期・新生児の生理と病態について学習する」で修得した知識を確認し踏まえながら、知識の活用と応用について理解し実践できるよう事例を用いて説明するなど、学生の知識がより定着できるよう工夫した。技術では、基礎となる知識を始め、そのメカニズムや応用についてしっかりと学んだうえで、演習を通して技術が定着できるよう工夫した。筆記試験の結果から、学生はしっかりと知識を身に付けることができていたと言え、取り入れた教育方法のねらい、本科目の目的、目標としては達成できたと評価できる。

4. 授業科目における運営上の課題

運営上の課題は特になし。

5. 次年度以降に向けた改善策

周産期実習を履修した4年生が対象の科目であるため、産褥期の女性や新生児の看護についての基礎知識・技術は身につけている上での受講であるが、産褥0日～5日目（退院）、1か月健診までのすべての期間を経験できている学生は年々減少傾向である。学生が本科目の内容「産褥期および新生児期」について、分娩から退院、1か月までのすべての期間における変化・経過を理解しやすいようにさらに資料や講義内容、動画などを取り入れたり、演習内容を臨床現場により近いものにしたりと、工夫の内容を検討していきたい。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
実践地域助産学	角川 志穂	選択	4 年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

学生による授業評価票の提出はなかったが、事前課題や事後課題にすべての学生が主体的に取り組み、特に育児期にある母子の健康教育では、学生同士が集まり事前学習を行ったうえで講義に参加しており、積極性が伺えた。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

6名全員がA評価であり、地域における母子保健活動の意義と実践について理解し、地域につなげるケアの基本的技術を習得することができていた。なかでも、非常勤講師である助産師から地域における子育て支援の実践について講義があり、具体的な支援方法について教授されることで理解が深まっていた。

3. 教育方法の評価

本科目の講義を行うにあたり、学生の課題として大きく2つ挙げられた。

課題の1つ目として、学生は在宅で療養している医療的ケア児にかかわった経験が少なく、退院に向けた退院調整や退院後の支援についての理解が難しい。

課題の2つ目として、双子を出産した母親とその家族の退院後の生活についてのイメージが湧かない学生が多く、育児期にある母子の健康教育や保健指導の組み立てが難しい。

1つ目の課題については、NICUで医療的ケア児に関わった経験のある助産師（臨時教員）に講義に参加してもらい、退院後の生活の様子や支援の実践について話をしてもらうことで、どんな支援が必要であるか考える素材を提示してもらった。そのうえで、学生同士でディスカッションを行い、理解を深めた。

2つ目の課題については、双子を育てている母親と父親の生の声をDVD視聴してもらいニーズを捉えた上で、保健指導案を作成し指導案に基づく演習まで行った。学生は演習を通して母親や父親としての立場になることで「この方法では実践が難しかった」などと指導方法の見直しを感じ、指導計画の修正まで行うことができた。

このように、助産師からの講義や対象者の思いについて教材を使って伝えることで学習がより深まったと考える。

4. 授業科目における運営上の課題

今年度運営上の課題はなかったが、次年度より新カリキュラムになり講義内容が変更となるため、学生の学びを深める教育方法の検討が必要である。

5. 次年度以降に向けた改善策

出産後の多様な家族への支援について考えるにあたり、周産期看護実習では比較的ローリスクのケースを受け持つことが多く、多様性に触れる機会が少ない。そのため、学生の理解を促すためには、イメージ化を図れるような題材を提供するとともに、可能な限り実践的に学ぶことができる環境として対象者の声を聴くことや助産師からの実践的な学びを得る機会をもつ等整備する必要がある。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
助産管理学	川野亜津子	選択	4 年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

本科目は「助産師の活動に関わる管理の概念とその実際について理解し、助産師活動の場と責任について学ぶ」という目的および目的に準じた 5 つの到達目標のもと、学習課題を設定し、15 時間の講義を展開している。評価方法は事後課題 60%、課題レポート 35%、学習態度 5%としている。講義では、助産管理に関する基礎的な知識を始め、臨床助産師（管理者）による講義を取り入れて、学生が助産管理についてその実際を具体的に理解できるような学習内容・方法を取り入れた。また助産管理に関する関連文献を調べ、整理させることにより、学生が自ら最新の情報を調べ知り、活用する方法が学べるような演習も取り入れた。学生からは、助産管理についてその実際を広く学ぶことができた等、学生は学習活動が円滑に、効果的に行うことができたと評価できる声があった。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

事後課題 60%、課題レポート 70%（各々、学習目的、課題に沿ったテーマのレポート作成）にて評価を行い、受講者のうち全員が A 評価であった。本科目の目的である「助産師の活動に関わる管理の概念とその実際について理解し、助産師活動の場と責任について学ぶ」という目的、および目的に準じた 5 つの到達目標を概ね達成できたと考える。

3. 教育方法の評価

講義では、助産管理に関する基礎的な知識を始め、臨床助産師（管理者）による講義を取り入れて、学生が助産管理についてその実際を具体的に理解できるような学習内容・方法を取り入れた。また助産管理に関する関連文献を調べ、整理させることにより、学生が自ら最新の情報を調べ知り、活用する方法が学べるような演習も取り入れるなど工夫した。事後課題 60%、課題レポート 70%（各々、学習目的、課題に沿ったテーマのレポート作成）では、学生が修得した知識を整理できるような課題を提示し、学生の知識がより深まり定着できるように工夫した。また講義内容として資料や説明は図やグラフなどを用いて示したり、具体的に知識が深まるように事例を紹介したりなど、学生がイメージしながら知識が定着でき、学んだことを振り返り考えたり、看護へ応用できるように工夫した。事後課題、課題レポートの採点結果（ルーブリックによる）から、学生はしっかりと知識を身にけることができたと見え、取り入れた教育方法のねらい、本科目の目的、目標としては達成できたと評価できる。

4. 授業科目における運営上の課題

運営上の課題は特になし。

5. 次年度以降に向けた改善策

例年国試対策ゼミにて、助産所に関する法的知識が全く身につけていない傾向にあるため講義に盛り込んでいるが、知識の定着は今一つである。そのため助産所に関する演習（法に基づいた設立）を検討する。